



夕刊 (刊) 一月二十五日 第一頁 四〇〇〇 部二五五 部二五五

改革概論(言)

大内 民 惠

第五章 中學校

而して入學當初は學校の規模設備等はるかに小學より大きくもあり完全もして居り先生もそれと専門の先生で、えらさうに見えおそろしくも思ふのでありま

橋本氏の態度に

平町民漸く批難

身勝手な仕打は第三

校道路のみではない

平町第三小學校正門前の校本町とよぶ七丁目附近一帯が地主橋本高右衛門氏の

家屋税の女代議士

出るか出ないか

來五月十一日に於ける選挙が見もの

家屋税調査委員選挙は來五現である平町に於ける右名

四苦八苦の炭礦

霜枯をどう過す

平稅務署に其苦境を

裏書する税金の滞納

遙視録

は生

常盤の各炭礦は打續く業界の不振に加へて現下の極度の不景氣に四苦八苦裡に事

産業會組織

振興會組織

植田町に

魚市の認可

六日入會式

日比谷座の幕あちて第三日議會は例によつて名譽のもの、劍闘となる、鴨物

石城郡植田町は同郡南の都邑で魚類行商約百名位ある



石城部に於ける
米問題の重要
性とその検討
外山生

茲に於て生産消費が尤も合理的に圓滿に行はれる次第で商取引を業とし中間搾取を生活根元とする人達に取つては氣の毒な次第だが是も時代思潮の現れである。すれば其の方面の人達は外に何とか生活基礎を見付けたり対策を講ずることの方より適切であるまいか。電氣の發明はランプを消して了つた世の中だもの。其處で此の事は今日既に平附近にも設立され更に普及發達の道程にあることを見通してはならぬ。何故に營業經驗の乏しい農民が此の事を經營して而も百年練磨の商人を壓倒し心膽を萎からしめて凱歌を奏得るか。事は極めて簡單に説明出来る。即ち十萬石二十萬石も移入せねば需給の平衡を保ち得ない程の大なる消費地であるが故に……而も移入するに産米よりも商品價値が劣悪廉價な立場で生産米を利用取引する運命にある現在の農民の立場に於て此の事即ち其同力による積米の販賣によつて僅かに移入産米の米價に到達することが出来て利益を計算し得る現狀に於ては然らぬ。然らば茲に米商人としての對策は如何、生きる道は何の消費の實狀に照らし營業が

針の變革をすることである。由來石城の米消費の大宗と言へば先きに述べた通り、炭礦工場、漁村等である。是等は常に經營主が利益を基礎とした計算に於て買米を需用するの必要に迫られてゐる現狀に見て、更に此の消費米に牽制されつゝある一般市場取引の實際に照らし米商人としての對策を云ふならば甲乙二途に出する外はあらず。

スペイン G.H.N 元 詰
セ 味 葡 葡 酒
ル フ ポ ー ト ワ イ ン
Y 1.10
御 婦 人 の 方 に は 少 し 水 を 加 へ て
召 し 上 る と 風 味 一 そ う 佳 良 ぞ
電話 西村屋藥舖 (三番)

轉移 御知らせ
皆々様に特別の御ひ
のきを頂きましたが
今回一丁目横町から
平野前(大通り)に移
轉いたしました。カフ
エーターは皆様御
存じの通り御客様本
意の勉強いたします
相變らず御ひのきを
御願ひします。

カフエー
タマ
平野前
電話六二〇番



よろこばさいませ
うーちりませよ
中島寫眞館
平野前田町

安價に
迅速に
町噂に
親切に
福島縣石城郡平野
遠藤活版所
電話七四三番

諸毒下シの大妙藥
安流丸
千四百五丁目角
特約山野邊藥局



平野前田町通電話六二〇番
平野前田町通電話六二〇番

樽詰生ビール並に
タンク入ソーダ水
平野前
橋矢のソーダフアンテン
ゾヨツキ 一杯 十五錢
ソーダ水 各種 十五錢

ごうそ御散歩がてらに御来店を
美味で 平野前田町 サロン
評判の

お兒様同伴
のご散歩に
保健と衛生
を兼ねたる
乳母車各種
平野前三丁目 電話三五九番
外(運動用)各種 丸 は ん
に(小兒車)



ライ
寫眞館
電話六二〇番

高級車
グラハムページ
たしましたい車入がンダセ
すまひ願乗試御非是
電話 三四三番

磐城代表
酒銘
美味味經濟
油醬ワマヤ
社會名合崎山
香十話電

入院應需 自炊の便あり
明雲堂眼科醫院
平野前電話六六九番